

## 小さな森の入口ー導入科目「モチーフワーク」の意味

### Motif Work as the Introductory Subject of IAMAS

金山智子

KANAYAMA Tomoko

**Abstract** 本稿では、“もっとも IAMAS らしい”といわれる導入科目「モチーフワーク」が、IAMAS、そして社会にどのような意味をもっているのか、その変遷を辿りながら考察する。

**Keyword** 多様性、対話、共創、進化

#### 1. モチーフワークの変遷

「モチーフワーク」は IAMAS に入学して最初に受講する授業である。全1年生と全教員が参加し、ほぼ一週間をかけて学修するこの授業が企画されたのは、開学の翌年（1997年）だった。当時は「イアマスウィーク」と呼ばれ、学生や教員がそれぞれ自由に講座を開くというものであった。企画の背景には、個々の専門技術を修得する科目が多く、各技術を融合した作品を制作できる授業やどのような作品を作るか思案するプロセスを重視する授業がなかったことから、アイデアを出し作品を完成するまでの制作過程を体験させる必要があった。加えて、多忙な学生と教員にとって息抜きの場の役割も担ったのである。

この取組みは、さまざまに形式を変えたが、最終的には 1999 年に「モチーフワーク」と名付けられ、以降、入学生が最初に受講する導入科目として定着した。2006 年に発行された IAMAS 十年史でも、「モチーフワーク」が本学の特色ある授業として取り上げられている。以下はその抜粋である。

IAMAS ではコンセプトから成果を出すまでのプロセスを学ぶ授業が多いが、中でも「モチーフワーク」は入学後すぐにアカデミーと大学院合同で行なう、通過儀礼のようなワークショップ型の授業で、非常に IAMAS らしさを持った授業だと言えるだろう。

掲載当時はアカデミーが存在しており、大学院と合同でこの授業を実施していたが、その点を除いては今とあまり変わっていない。とはいえ、技術革新や社会の変化、教育の見直しなどは当然、この授業に反映されており、「モチーフワーク」の変化を通して、IAMAS の教育の根幹的なものは何かを垣間みることができるだろう。そこで、まず大学院が設置された 2001 年から 14 年の間に「モチーフワーク」がどのように変化してきたのか、ガイドブックをもとにみてゆく。

下表には含まれていないが、2003 年から 2009 年までは「モチーフワーク 1」と「モチーフワーク 2」（2005 年は 3 も有り）に分かれており、1 ではリサーチと考察、2 はものづくり実習となっていた。後述するが、2012 年度以降、「モチーフワーク」は研究プロセス

を中心とするようになり、制作はモチーフワーク終了後に履修する「メディア表現基礎」となっている。さらに2013年、「メディア表現基礎」は「拡張モチーフワーク」と位置づけられ、2014年には「モチーフワーク」の後半部分と連動させたように、柔軟な体制で開講されている。

表 1. 2001 年から 2014 年までのモチーフワークの内容（IAMAS ガイドブックを参考に筆者作成）

2001～2003（全員）：本講座は4つのスタジオがそれぞれ主導するワークショップから構成され、最終的に小規模な展覧会又は何らかのメディアでのパッケージ化まで実現させる。こうした一連の制作と発表の体験の中から、 <u>学生各自の内部にあるモチーフ（=動機）を意識化させ、それが本学の横断的な教育研究体系の中でどう位置づけられるのかを客観的に把握させる。</u>
2004～2006（担当複数・全員）： <u>デジタル・メディアと現実世界の構造を調査することで相互の関係性を再確認する。</u> ワークショップ形式でグループで決定したテーマによる調査および考察を行ないその結果を発表する。その過程で基礎的な情報技術とその利用法を学びながら、一貫性のあるコンテンツとして完成させる。
2007（担当2名）：新入生にとって、新しい“場所”である大垣を題材にして、“場所”の独自性及び特徴性について深く考察し、その結果を発表する。ワークショップ形式で、グループに分かれて課題に取り組む。この課題を通して、 <u>今後の制作にも応用できるような、収集、選定、分類、配置、発表という一連の作業を体験する。</u>
2008（担当2名）：研究領域が異なる複数人がグループワークによりひとつの課題を作成します。共同作業においては、 <u>自分を含めたメンバーそれぞれの能力を客観的に理解すること、またそれぞれの能力を最大限に活かす制作プロセスを発見することが重要になります。また、与えられる課題はたんなる問題解決型のもではなく、その評価基準も製作者が新しく設定しているものであり、創造性が求められます。</u>
2009（担当複数・教員）：研究領域が異なる複数人がグループワークによりひとつの課題を作成します。共同作業においては、 <u>自分を含めたメンバーそれぞれの能力を客観的に理解し、それぞれの能力を最大限に活かす制作プロセスを発見することが重要になります。</u> 今回のモチーフワークは、情報工学の基礎となるプログラム実習を元に、機械と身体をモジュールとする複合体を考え、それを実現します。 <u>グループワークでの創造性が発揮されることを期待します。</u>
2010～2011（担当複数・全員）：研究領域が異なる複数人がグループワークにより1つの課題に取り組みます。ブレインストーミングによってアイデアを創出し、グループメンバーそれぞれが活発に議論し、1つの形にまとめていくことが要求されます。共同作業においては、 <u>自分を含めたメンバーそれぞれの能力を客観的に理解し、それぞれの能力を最大限に活かす制作プロセスを発見することが重要になります。</u> 期間内に教員によるレクチャーが設けられ、最終的にその成果をプレゼンテーションすることになります。
2012～2013（担当複数・全員）：1週間にわたる一連の経験的な学習には、ワークショップやレクチャー、様々なアクティビティが含まれる。 <u>視点の現実化や尺度、共通テーマの中の関連性に焦点を当てながら研究方法の具現化を探る。</u> Google、Facebookなどのメディアプロバイダによる情報のカスタム化や情報の氾濫に疑問を投げかけ、情報の検索、発信、可視化のための代替的な方法を調査する。
2014（担当複数・全員）：前半では約1週間の期間を通じて、教員と学生それぞれのプレゼンテーションと、グループでのディスカッション、フィールドワークを通じて、IAMASを構成するメンバーとして <u>相互の理解を深めていきます。</u> プレゼンテーションでは、 <u>多様なバックグラウンドを持つ参加者各自の視点を具現化していきます。</u> グループでのディスカッションでは、メンバーを随時組み換え、 <u>様々な関連性の中から各自のメディア表現のありかたを探索します。</u> フィールドワークでは、学外に出かけ、地域に対する理解を深めるとともに、その活用の可能性を探ります。後半では、与えられたテーマに沿い、教員もメンバーに加わるかたちでグループワークを行います。 <u>知識や技術ばかりでなく、個々が持っている多様な能力をグループの中で自覚して、それを生かすとともに、互いの考え方の違いを踏まえたグループワークのあり方自体を、実際の体験を通して考えることができればと思います。</u>

ガイドブックに明文化されている授業のねらい（下線部）を以下にまとめた。表現に多少の違いはあるものの、「モチーフワーク」では「異なるメンバーの共同作業により、自分を含め多様な能力を活かして創造することを体験すること」を主旨としており、大学院の設置以降、この一定の基本軸が維持されている。

- ・ 横断的な教育環境において、自分の動機を意識化し位置づけていく。
- ・ 研究領域が異なるメンバーで一つの課題に取り組む共同作業を通して、各自の能力を客観的に理解し、それを最大限に活かす制作プロセスを発見する。
- ・ 視点の現実化や尺度、共通テーマの中の関連性に焦点を当てながら研究方法の具現化を探る。
- ・ 知識や技術ばかりでなく、個々が持つ多様な能力をグループの中で自覚し、それを生かすとともに、互いの考え方の違いを踏まえたグループワークのあり方自体を実際の体験を通して考える。

授業形態は一貫してグループによるワークショップ形式を主としている。ほぼ一週間をかけ、ディスカッションやブレインストーミング、リサーチ（フィールドワークを含む）、企画と制作、そしてプレゼンテーションといった一連の作業をグループ毎に行なう。ディスカッションやリサーチなどの具体的な方法論については、その年の担当教員らが議論しながら考えるため、年ごとの授業内容は異なる。また、課題となるテーマや学修の対象は、デジタルと現実世界、大垣など地域、機械と身体、情報の検索・発信・可視化など、担当教員の分野や情報技術環境が活かされる。

## 2. 対話とコラボレーションの重視と実践

「先端的技術と芸術的創造の融合」を理念に掲げ、そこから新しい文化を発信する人材を教育していくことを目指す本学にとって、多様で多彩な能力をもつ学生たちによる共創は最も重要である。「モチーフワーク」は共創の概念を取り込みながら、それを体験する授業として明確に位置づけられてきた。換言すると、「モチーフワーク」は IAMAS の理念を具体化させたもので、これを入学後、最初に受講する本講義は、IAMAS の一員となる儀礼ともなる。前述した十年史の中で、「モチーフワーク」が「通過儀礼」と表現されているのは、この点を裏付けている。

さて、卒業後に最も印象に残っている授業は何かと卒業生にたずねてみると、「モチーフワーク」と回答するものが多かった。「こんなに多様な人たちと一緒に何かを創ったことがない」「全く違う発想を求められたことは初めて」という理由が多かったが、むしろ「それが今役に立っている」と言う回答が多くみられた点が印象的である。

「モチーフワーク」を受講したからといって、多様な価値観を理解し、異なる視点や意見の人たちとの共創力が習得されるわけではない。また、入学後の学生が、これまでと異なる発想が急にできるようになるわけでもない。開学以来、IAMAS では、社会や時代の変化に伴い、開学当初のメディアアートだけでなく、インタラクティブデザインやメディアプロダクト、ソーシャルデザインなど、より多様な領域による研究や活動へと広がっている。芸術系や工学系に加え、社会学系や経営学系など、多様な領域からの学生が増え、

年齢構成も 20 代から 50 代と幅広くなっている。この内、社会人は半分以上を占め、プロフェッショナルも多い。自治体や企業、地元コミュニティなど外部との連携も一層求められている。教育及び学修の場が変化する中、IAMAS を構成する教員と学生だけでなく、外部の多様な人たちとも理解し合い、共創によるコラボレーションを通じて、研究あるいは活動していくことが、これまで以上に重視される。

私自身は大学院教育だけのワントラックとなった 2012 年に IAMAS に着任した。これまで 3 回「モチーフワーク」に参加し、2013 年と 2014 年は担当教員の一人として関係した。ここでは、自身の経験をもとに、「モチーフワーク」における「対話とコラボレーション」の具体的な方法を紹介したい。

2012 年と 2013 年のモチーフワークではパネル展示方式を採用し、全 1 年生と全教員が話をする空間をつくった（2 年やスタッフも参加）。学生と教員は一对一でも、一对多でも話ができ、他の教員が学生と話しているのを聴くことも可能だ。着任早々で、主旨をあまり理解しておらず、また社会学系という“IAMAS で最も異なる”教員として何を話したらいいのか戸惑い、“自分が関連しそうな学生”を見つけて話をしていた。一方、他の教員がどのような（そして、どのように）話をしているのかに興味があり、“自分の領域と関係していない良くわからない学生”との会話や、“異なる分野の教員”の会話を横で聴かせてもらった。

実は、これは極めて重要なポイントなのである。それは、“まず相手に関心をもち、相手の話に耳を傾ける”という対話の基本が担保された空間を作っていることだ。また、授業の終盤に、学生は自分と関係があると感じる学生と自分をリボンで繋ぎ、他人との関係性を視覚化させた。リボンで繋がれた相手をみると、必ずしも分野や関心など既存の意識に基づいた繋がりとはなっていなかった。自分と関係がないと思っていた相手と実は関係があることに気づかされたり、新たに関係を作りたくなるよう動機づけられたりと、対話的な空間によって生まれた関係性を表現することの大切さに気付かされる機会となった。



図 1. 2013 年「モチーフワーク」では各学生が自分と関連する人をリボンで表現

前述した以外にも、ぺちやくちゃ方式による教員紹介や学生のビブリオバトルといった新しい方法を取り入れ、教員間でも新たな発見があったり、学生の個人的関心を知ったりと、理解を促す内容となっていた。

この年は、「モチーフワーク」に続いて、拡張モチーフワークを実施、グループごとにあるテーマをもとに企画を考え、プレゼンテーションを実施した。この拡張モチーフワークだが、一ヶ月以上の長期にわたったことから、グループによってはメンバー間での対立や分裂、完全な分業体制による制作と、共創環境とは言いがたい状況でプロジェクトをすすめるなど、さまざまな問題が噴出した。授業の構成や内容にも問題があった可能性もあるが、多様な人たちが一つの課題に向かってコラボレーションしていく難しさが改めて露呈したと言えるだろう。

2013年度の経験や反省を踏まえて、2014年は「モチーフワーク」を前半と後半に分け、前半部分では、2013年のフリーな対話空間を維持しながら、ワールドカフェやアンカンファレンスといった異なる形式のワークショップを採用し、多様なメンバーの相互理解、自分の視点の具現化、そして多様なメディア表現のあり方の探求を徹底させる内容となった。後半では、学生たちの多様性を担保しつつグループ編成を行い、具体的なテーマのもとで作品制作を行なわせた。



図 2. 2014 年「モチーフワーク」ではワールドカフェを実施、学生と教員が混じって対話

前半のワークショップで異なる視点や多様性について理解しつつも、後半の実践のグループワークでその困難さに直面したものが多かった。以下、学生からのモチーフワークへのコメントの一部を紹介する。

最初は「如何に口論をすることなく、有意義な議論をもって楽しく製作に望めるか」に焦点をあてていた、つまりは、製作者同士がエゴのぶつかり合いにならないように一定の距離を保ちながら、デザイン思考によってスマートに問題解決をする事で課題を成立させようとしていたのである。次にそうした手法によって蓋をしていた、個々のエゴの部分が見え隠れし始め、それに対し正面

から話合わなくては本当の議論は出来ないという状況に陥る。これを解決すべく用いた手法は、アート表現のモチベーションになりうるネガティブな要素を共有する事である。それにより、お互いのポジティブな表層だけではなく、より深層まで理解をする事ができ、その結果不必要な言葉の誤解が解け議論がスムーズにできるようになった。

グループで何か作るときには 100%自分の納得するものを作るのは難しいということである。そのため、何を作るかのディスカッションにおいて、前提の共有や考えていることのすり合わせをしっかりと行うべきであると感じた。しかし、ある程度の議論の後に話が堂々巡りに陥ることがあった。おそらく議論をしているだけではその状態から抜け出すことはないため、議論だけで考えず、何らかの行動をしながらの試行を行うべきであると感じた。

異なる価値観や考えの人たちとの共創作業で直面した問題について、何が原因か、どうやったら解決できるかといった議論だけでなく、プロトタイプ制作、分業など、さまざまな方法を試行しながら実践的に学んでいることがうかがえる。何が期待されているのかを推測し、それに合わせて作るという今時の典型的な方法から離れ、期待されるものそのものを自ら創るため、現存のメンバーの能力を最大限に活かす方法を考え、動機づけいくことこそ、「モチーフワーク」の真髄だろう。そして、「モチーフワーク」は、それ自体が、常に見直されながら、新たなやり方や考え方を取り入れながら、進化し続けている授業なのである。

### 3. IAMAS にとっての「モチーフワーク」

21 世紀に入って、平和構築、社会課題の解決、イノベーションの創出など、持続可能な社会へとシフトが急務となり、近代の物質文明を超えようとしていく中、多様で多面的な社会を構成する人々の間での共創作業がますます求められている。その際、異なる価値観や文化、異なる分野や考えの人たちについて理解することは、最も必要で、最も難しい。

現実には、私を含め、専門重視の教育を受け、ツリー型の学問モデルの中で活動してきた教員にとって、分野や専門の異なる教員同士が理解し合い協働していくことは、学生以上に難しいと感じる。2012 年に、スタジオ制から領域制へと変わり、さらに領域制を閉じることになったが、この教育体制の見直しには、この問題が関係してくる。IAMAS は、いわゆる横断型教育や学際プログラムとは違う。理念にある「融合」という言葉の意味はそこにあり、それを実現するという作業は大変重いものである。「領域を越え、互いに理解し合い、共創することで新しいものを創造する」という理念は、「モチーフワーク」という授業だけでなく、IAMAS の教育全体にさまざまな形で具体化される。言い換えれば、そうしなければならないほど理念の実現は容易ではない。学生がグループワークで直面したように、教員も領域回帰や専門性重視といった状況に陥る可能性を常に内包している。毎年、年度初めに全教員で「モチーフワーク」に参加するのは、教員の共創的コミュニケーションの「場」であり、その重要性を認識していることを自他共に確認する機会なのである。「モチーフワーク」が学生にとって通過儀礼的なものであるとすれば、教員にとっては理念を目指す姿勢を確認する儀式的イベントとも言えるであろう。



生命機械工学の研究者である三輪敬之は、生体電位変化の関係から二百本の樹木間のコミュニケーションを調査し、同じ場所のなかで、樹木は数十本からなるグループを横断的かつ柔軟に形成し、構成メンバーである樹木の一部は四季を通じてダイナミックに入れ替わり、グループの境界も時間的、空間的に変化していることを明らかにした。そして、これが全体の多様性を維持させていると推測し、「自然林の樹木は、単純に棲み分けをしているのではなく、ドゥルーズらが提唱したリゾーム的なネットワークを組んでいるともいえる」と述べている<sup>1</sup>。

IAMAS は、教員や学生といった木々が互いにコミュニケーションしながら、時間的、空間的に常に変化し、多様性を維持しようとしている小さな森のようだ。連なる森の中で、この小さな森は常に違った色、音、香りを放ち続けていく。この小さな森に足を踏み入れたものは、ここがこれまでに存在する森とは違うことを感じ、そして、あるものは期待を胸に、別のものは不安を抱き、森の奥へとすすんでいく。こういった人々を迎え入れる森の入口が、「モチーフワーク」なのである。

---

<sup>1</sup> 三輪敬之. 共創における生命的コミュニケーション (清水博編「場と共創」) NTT 出版, 2000.